

体育授業の発話に関する探索的研究 －「できる」に結びつく言葉を明らかにするために－

清水 将*, 志和 孝洋**

(令和6年2月5日受付)

(令和6年2月5日受理)

SHIMIZU Sho*, SHIWA Takahiro**

Exploratory Research on Speech in Physical Education Classes
: To Clarify the Words Connected to "Can"

要 約

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、授業の中では一方的な発言に対する応答ではなく、深い理解を伴った双方向の対話が必要とされる。児童生徒が何を話しているかを把握するために小学生を対象に話し合いと振り返りの記述を分析した結果、体育では、教室とは異なる場で学ばれるため、小集団で交わされる会話は、一般的な会話分析に現れるような原則とは異なっていることが明らかになった。本研究では、小学生のゴール型球技におけるゲームの前の話し合いに焦点化して分析したところ、それぞれの会話のやり取りや言葉は、振り返りとは異なる傾向が見られ、体育特有のパターンが示された。話し合いの量は、振り返りの記述量に影響を与えず、球技の話し合いにおいては、「こっち」などの空間や位置を示す言葉が多く出現し、できるようになるための会話がなされていた。また、運動量と振り返り記述には相関がないことが示唆され、授業改善につながる知見が得られた。

1. はじめに

平成29年に告示された学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現へ向けた授業改善が必要とされている。この主体的・対話的で深い学びの主語は、子供だと言われており(国立教育政策研究所, 2020)、従来の学習指導要領が「何を教えるか」という内容を中心に構成されてきたのに対し、新学習指導要領は、児童生徒の資質・能力で組み立てられ、教師中心の教育観からの転換が図られている。児童生徒が「何ができるようになるか」という観点で授業改善を図ることに

よって、資質・能力を確実に身に付けられるようにすることが意図されているのである。学校教育の基本的構造が「教えること (teaching)」から「学び (learning)」へ転換されたと考えることもできよう。主体的・対話的で深い学びとは、このような教育観の転換の中で、児童生徒が「どのように学ぶのか」を具体的に示したと考えられている。知識基盤社会の到来によって、従前のような知識の習得だけでは十分ではなくなり、習得した知識を活用し、探究する力が社会から要求されるようになったからである。社会で期待される能力観は、スキルや態度を含めた人間全体の能力であるコン

* 岩手大学教育学部, ** 岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻

ピテンシーといわれる概念に変化している。変化の激しい時代においては、未来を創り、社会や人生をよりよいものに変革させなければならない。そのような well-being を目指すために主体的に学び、多様な他者と協働することが求められるのである。石井 (2016) が、知識を活用し、創造する力は、「思考しコミュニケーションする必然性のある文脈において、協働的で深い学習（「真正の学習」）に取り組む中でこそ育てられる」と指摘するように、このような授業づくりが重要と考えられているのである。

佐伯 (1996) によれば、学校教育における学びへの転換は、「共同体への参加」である。学校を学びの場にしようとする改革は、わが国でも以前から取り組まれている (佐藤, 1996a)。協同の意味するところは、佐藤 (2010) によれば、勉強では個人に成果が帰されるが、学びにおいては、自分のアイデアを提供し、仲間のアイデアを取り入れるというような互恵的な関係が築かれることにある。したがって、そこでお互いに交わされる対話やコミュニケーションは、一方的な教え合いではなく、双方向的な学び合いであることが期待される。また、対話としてのコミュニケーションは、「聴く」ことの優位性に特徴があり、単なる伝達ではなく、新しい出会いがあることが重要とされている (佐藤, 2014)。つまり、学びにおけるコミュニケーションは、発信されたことを受信するだけでなく、受信したことを発信するモデルになることに特徴がある。学びは、基本的には一人では成立せず、協同する他者を必要とする。心理学者ヴィゴツキー (2001) によれば、学びはコミュニケーションにおいて成立するとされ、対話できる集団をつくることで学びを促進することになるのである。

教室のコミュニケーションを概観すると、わが国の状況には特徴が見られる^{注1)}ことが指摘されている (藤江, 2006)。わが国における近代教育の導入では、1教室の人数が50人に設定され、一斉授業という形態を基本とした。人数の標準が35人となった現在でもその様式や形態は大き

く変わっていない。一斉授業方式は、わが国の教育の根幹を支えてきた効率的な方法であることは間違いないが、現在では、その欠点も指摘されるようになり、個別最適な学びや協働学習、グループ学習等の協同的な学びのような新たな学び方も提唱されるようになった。秋田 (2006) は、Blatchford et al. (2001, 2002) の研究を踏まえ、学級規模で相互作用が変化することを示している。授業の人数が問われることなく、方法論だけが先行して導入しても、その効果は高まらない。学級の人数や学習内容によって指導方法を柔軟に選択する必要があることが示唆されている。

現在では、聴き合う関係を基本とした対話のある授業へ向けて改善が求められている。その実現が図られているかを評価するためには、授業における発話が対話^{注2)}として成立しているのかを分析する必要がある。対話であるためには、授業の発話を抽出してテキスト化するだけでなく、受信したことに応答して発信しているかという観点から検証する必要があることも指摘されている (佐藤, 2010)。そのためには、授業の中に対話が成立しているかをその構造から検証していく必要がある。

会話を捉えた研究を概観すると、会話の一般的な規則は、よく知られているわけではないことが指摘されている (山田, 1999)。一見でたらしめに見える会話の中には、一人が話し、相手は耳を傾け、どこかで話し手の交代が起こるという自明の基本的な構造^{注3)}がある。しかし、授業の会話は、社会制度を背景とする授業という特殊な状況のため、このような規則には必ずしもあてはまらない (佐藤, 1996b)。教室の会話を分析することで学校文化という新たな枠組みが見いだされたように、体育では、他の教科の授業とは異なる特徴的な会話やコミュニケーションがなされていることを見いだすことが可能になるとも考えられる。体育の授業ではその特性として、一斉指導形式であっても運動を学習する場面では、児童生徒一人一人が学ぶ構造を備えており、発話も教師と児童生徒の関係に限定されずに対話が行われてい

る。また、体育では戦後の比較的早い時期からグループ学習が導入された経緯もあり、児童生徒が小集団で構成されることも少なくない。江刺ほか(1973)によれば、特に体育においては、契機となった1953年の学習指導要領においてB型学習・ボール運動の学習形態として、便宜上形成される班別学習とは区別されてグループ学習が実践されてきた。体育におけるグループ学習論は、その後十分な発展が見られたわけではなく、運動中の各児童生徒の発話を記録し、分析する方法論がなかったことや、その発話をテキスト化(トランザクション)する技術が高くなかったこともあって、これまでに十分な研究が行われてきたわけではない。しかし、実際のボール運動の学習場面において、どのような対話が行なわれているのかを把握することは、授業改善に有効な取り組みであることが考えられる。そこで本研究では、GIGAスクール構想によって児童が授業で使いこなすことができるようになったICT端末を活用して、どのような学びが行われているのかを明らかにすることを目的とする。運動学習中の話し合い場面における発話に着目し、その方法論を確立するための知見を得ることとする。

2. 方法

対象となる授業の概要は、X県Y小学校の異学年合同で構成された高学年5名(男子5年1、6年1、女子5年1、6年2)によるボール運動領域ゴール型、教材名2ゴールサッカー6時間単元である。授業のねらいは、上学年がアシストパス、下学年はシュートとし、メインのゲームでは、上学年に攻撃専門かつアシストパスに専念する「フリーマン」を割り当て、常に3対2の状態で行なうことができるようにした。2人の組み合わせとフリーマンは、各授業で変えるようにした。

2-1. データ取得の手続き

2-1-1. 音声データ

児童の話し合いに限定して、データを収集した。

話し合い活動の際に、児童が使用する端末(iPad)の授業支援アプリであるロイロノートのカードに各チーム(グループ)の音声を録音するように教師から指示した。授業後にノートをエクスポートし、音声ファイル(m4a形式)をiPhone(iPhoneXR)のAI音声認識アプリCLOVA Noteを使用して漢字仮名交じり文でテキスト化した。テキスト化されたデータは、体育授業の特徴を踏まえ、明らかな誤変換については、分析の前に補正を行った。ゲーム間の話し合いが設定された2時間目から5時間目までの4時間のデータを研究対象とした(図1)。

図1 単元構成

	1	2	3	4	5	6
5	ドリルゲーム					
15	タスクゲーム					
20	話し合い					
40	メインゲーム					
45	振り返り					

2-1-2. 文字データ

各授業で記述させた学習カードの振り返りをテキスト化した。原則的に仮名づかいは、児童の表記をそのまま変換した。単元6時間と単元終わりのまとめのデータのうち、音声データと対応させるため、2時間目から5時間目までの振り返り記述を研究対象とした。

2-1-3. 運動量・ゲームパフォーマンス・授業の満足度

運動量を簡易的に測定するため、歩数計(オムロン社製HJ-325)を装着し、各時間で記録した。授業中のゲームにおける技能の変化を調べるため、ビデオカメラ(SONY製HDR-CX675)でコートを撮影し、映像から触球数、パス、シュート、アシストパス(得点につながるパス)、得点を算出し、それぞれの児童の技能レベルを5段階で評価した。授業の満足度は、形成的授業評価を参考

にして3段階(3～1点)で評価し、総合点で判断した。

2-2. 分析方法

音声データについては、変換されたテキストについて、総量を測るために、文字数を算出した。会話の構造を調べるために、テキストを手がかりに回答のパターンを分析した。発話の内容を調べるために、テキストをユーザーローカル (<https://textmining.userlocal.jp/>) を使用してテキストマイニングを行った。スコアの重み付けは使用せず、出現頻度のみで分析した。頻出する用語を調べるためにテキストを形態素に分解し、品詞毎に共起関係を分析した。

文字データについては、記述の内容を調べるために得られたテキストを同様にユーザーローカルを使用してテキストマイニングを行った。スコアの重み付けは使用せず、出現頻度のみで分析した。頻出する用語を調べるためにテキストを形態素に分解し、品詞毎に共起関係を分析した。

得られたデータについては、発話と記述の量的、質的な違いを文字数、出現する単語や共起関係から一致しているかを検討し、技能のできばえ(ゲームパフォーマンス)や運動量(歩数)との関連を検討した。

2-3. 統計処理

各児童の記述に対する特性を調べるため、JS-STAR XR+ (<https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>) を使用して、クラスカル・ウォリス検定を行った。有意水準は、5%未満に設定した。

2-4. 倫理的配慮

本研究は、岩手大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認(第202107号)を得て行われた。学校長及び担任に対して研究の目的や方法を文書及び口頭で説明し、研究の参加に同意が得られない場合には申し出に応じること、研究の不参加や中止があっても不利益を生じることはないことやデータの管理について事前に周知した。

また、研究結果の公表にあたっては事前に相談をすることとし、プライバシーに配慮して個人が特定されないことがないようにした。

3. 結果

実践された授業及び児童については、各時間における児童の授業アンケートの結果は、図2のとおりであり、第2時の6年生の満足度が低かったが概ね満足された授業と考えられた。

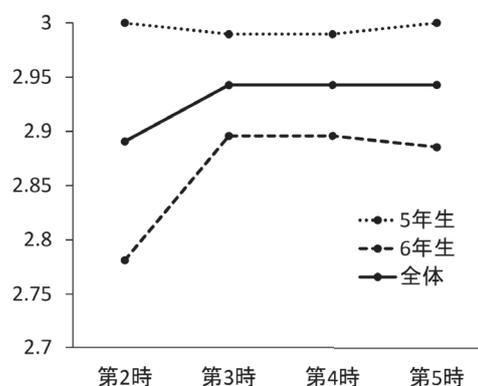


図2 授業アンケート

各時間の振り返り記述の文字数の多さについては、有意な差は見られず($H=5.66, df=3, ns$)、個人間で特定の傾向は見られなかった。つまり、振り返りの多さは、児童個人の性向によるものではないと考えられた。

各時間に発話された音声のテキスト数と記述のテキスト数の相関係数は、 $r = -0.17$ となり、相関は見られなかった(図3)。話し合いにおける発話

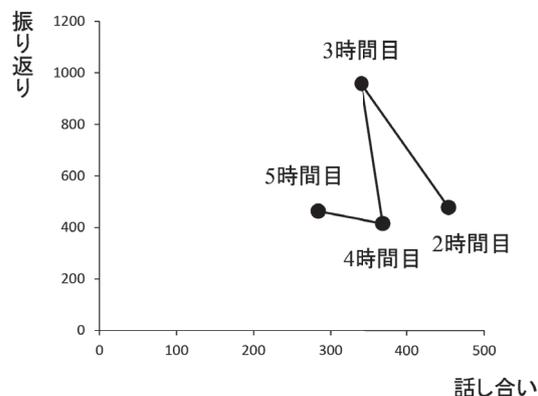


図3 発話と振り返り記述の文字数

を包括して授業中に使用される言葉に焦点化しており、コミュニケーションのためではない言葉も対象としていることを鑑みれば、発話という用語を用いることが適当と考えられた。

応用言語学では、言語は、表現手段だけではなく、行為の遂行^{注7)}にも用いられる。スポーツにおいても、行為を遂行するために言葉はよく使われている。体育授業でよく使われる用語としてのオノマトペ^{注8)}は、意味よりも音感が重視されており、動きを発生させるタイミングや力の加減を示している。これらは、動きの発生に関わって、コミュニケーションとして使われる場合もあるが、多くは、動作、すなわち行為の遂行、動きに伴う言葉である。このような擬態語も本研究の目的となる。

本研究で見いだすべき言葉は、動きに伴う言葉、動きを促発する言葉であるので、コミュニケーションという機能の有無にこだわらず、技能を習得する際に有効な言葉の抽出にある。しかし、動きが発生した原因は、前時までの文脈に依存し、抽象的な概念知が影響していることも考えられる。会話分析で文脈を捉えて言葉を解釈することは、文脈依存性と呼ばれるが、好井(1999)は、授業の会話分析は、その発話を文字化しただけでは、その授業以前に行われた影響を十分に説明できないことを指摘している。つまり、その授業や会話で行われるやり取りは、それ以前の影響を受けている可能性があり、その点を踏まえて分析する必要がある。例えば、サッカーにおいて、ボールを持っていない児童がどこへ行くかを考え、三角形をイメージすることによって、動くことができるようになったとすれば、できた後に発せられたとしても「三角形」という言葉は、動きの前に学ばれ、言語が動きを促発したことになる。分析する際には、可能な限りその状況を掬い取る努力が必要となるが、それとは反対に、できたことが先で、それに付随して言葉が発せられれば、その経緯を含めて言葉を抽出することが重要と考えられる。動きと言葉の前後関係を明らかにすることは、指導の際に重要な情報になると考えられるの

で、授業における技能のできばえとあわせて発話を分析することが不可欠と考えられる。

会話では、先述した順番取りシステムのように、誰かの発話中には他者は傾聴し、発話しないことが求められ、これらが会話を成立させる基礎的な条件となる。そして、隣接対^{注9)}といわれるパターンで会話が進行する。山田(1999)によれば、日常会話であっても、会話中の強引に話し手が変更される「割り込み」や「沈黙」を最小化する「オーバーラップ」、順番取りシステムが機能していることを示す「沈黙(ポーズ)」等が生じる。しかし、体育の授業中に特有の状況として、球技では小集団毎のコミュニケーションが不可欠となる。自らの行為遂行のためにセルフトークなども発せられるので、順番取りシステムが機能していないことが推察される。授業の構造は非常に複雑であるが、今回の研究対象は、体育授業の中でも各小集団が会話として話す場面の分析として位置づけられる。このような場面における音声は、小集団に1台のマイクで録音することが可能になる。その一方で、運動中のセルフトークを録音するには、運動中の音声に対応できる機器を話し手となる児童全てに準備する必要が生じる。また、運動中の会話を収集するには、各発話との重複を処理する必要がある。その処理については改めて方法を開発する必要があると考えられた。

授業は、概ね満足度が高く行われていたが、対象となる5人を集団で見た場合、発話と振り返り記述の文字数に相関はなく、よく話し合いをしているからといって振り返り記述が増えるわけではないことが明らかになった。

運動量と振り返り記述量の関係を個人で比較してみても、運動量は大きく変化していないことがわかり、運動量と記述量に相関は見られなかった。

運動量と記述量の相関を児童の属性から比較してみた場合には、性差の影響も否定できないが、技能の高い男子児童は相関が強くなく、低い女子児童は相関が強くなることが見られた。また、4名の児童は、マイナスの相関を示していることから、運動量が多くなると記述は少なくなることが

考えられた。

運動量が少ないことをできばえが悪いと考えれば、その際には記述が増え、うまくいっているときには少なくなると考えられた。したがって、小学生においては、記述が少ないことがパフォーマンスを悪いと判断する理由にはならないことが示唆された。うまく動けないときの記述の特徴には、文字で書くことができる場合と書くことが困難で、図で視覚化して記述する場合がある。図示することによって情報量が増加することを考慮すれば、思考の可視化という観点では、文字以外の示し方をどのように評価するかについて整理することも課題と考えられた。

体育授業は、高橋ほか(1994)によれば、マネジメント、インストラクション、認知学習、運動学習の4場面に分けられる。実際の体育授業中の発話は、児童による同時多発的な会話であり、教師と児童が交互にやり取りするような特有の会話ばかりではない。このこと自体が体育授業の特徴を示している。しかし、本研究で対象としたのは、このうちの認知学習場面であり、小集団でコミュニケーションが行われることに特徴がある。認知学習場面では、児童同士の話し合いがなされているため、インストラクション場面のように教師の発問から会話が始まるわけではない。各時間の話し合いにおける会話のパターンを実際にみると、教室に特徴的といわれる「発問－応答－評価」ではなく、「説明－同意」が多く出現していることに特徴がある。この「説明－同意」は、さらに理解を深めるため、シミュレーションによって異なる状況が示され、同意が繰り返されている。このような小集団の中では、児童の技能差によって発言の主導権が決定することも少なくない。短時間の話し合いでは、順番取りシステムによれば、常に特定の児童を中心に発言が開始され、最初の話し手となり、それ以外の児童はその話題に従属的にならざるを得ない。しかも、最初の話し手は、容易に交替しないで役割固定的であることも多い。しかし、対話的な学びを求める授業では、話題が転換し、最初の話し手が次々に交替すること

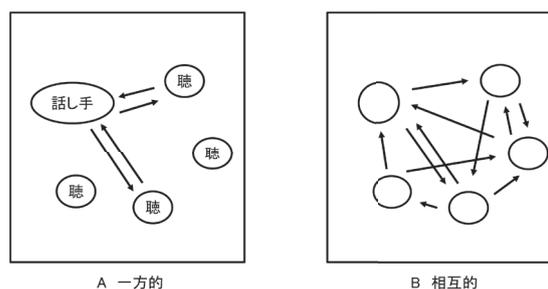


図7 話者の関係

によって相互的なコミュニケーションがなされることを期待したい(図7)。したがって、「質問→提案→同意」のように、最初の話し手が容易に交替される関係性を構築することも学びには重要と考えられ、このような互恵的な関係性の中で新たな知見が生み出されることが推察された。運動学習では、誰かができるようになったコツを、誰でも利用できるとは限らない。他人のコツを与えられ続けるだけでは効率的に運動ができるようにはならないので、できるようになるためには、自分に合ったコツを探す必要がある。そのためには、できない場合であっても自分から言葉を発する必要がある、できるようになるための言葉を生み出していくことも重要であると考えられた。

話し合い及び振り返り記述に共通して多く出現する言葉は、教材の特徴である「フリーマン」やゴール型の特徴を示す「ボール」や「ゴール」、「動く」であった。しかし、これらの言葉は、学習内容にかかわる重要な言葉ではあるが、動きを生み出し、「できる」につながる言葉ではない。一方で共起する言葉に注目すると、話し合いでは「こっち」が多く出現し、その場において相手に伝えようとする会話が視覚的に伝えられようとしていることがわかる。ワードクラウドにおいても会話の特徴的な言葉が出現している。それに対して振り返りのワードクラウドでは、「位置」という言葉はあるが、具体的な空間は示されていない。

視点を変えれば、これらの児童から出現した言葉の多くは、空間に偏っていて、時間的なイメージを伝えたものは少ないことがわかる。技能の発揮には、タイミング(時間)、スペーシング(空間)、グレーディング(強弱)の理解が必要とされるが、

表5 話し合い

フリーマンがここにボール持ってるとしたら、
うん
ここいるでしょ。
うん。
そんな時にこの守備はここにゴールいて、
うん
このいるときに、
うん、
渡しちゃうじゃん。そしたら絶対来るじゃん。あの、欲しいから。
そうそうそう、
だからそんな時に違う方向にいないとダメだ。
え。
こいつもこいつ。ここじゃなくてこっちでよかね。
うん。
で渡して、ちょっとドリブルして。ポコン。
そうそうそう。
で、これがいけなかったら他のやつがここら辺にいて。パーン。

このうちのスペーシングに関わるものが多く発話されていることが明らかになった(表5)。効果的に動くためには、タイミングやグレーディングに関することも話題にあがる必要があると考えられた。翻っては、教師の指導においても「いつ」「どこへ」「どのように」動くかを教え、時間、空間、強弱について思考・判断させることが重要であり、その中でも時間や強弱について充実を図る必要があることが示唆された。ゴール型の「できる」に結びつく言葉は、イメージを具体化する言葉であり、その特徴には、①「どこへ」行くかという場所や空間を認識する視覚化する言葉、②「いつ」という時間や「どれくらい」という力の加減や強弱を擬音にしてリズム化する言葉であることが推察された。

最後に、研究方法としての課題を考察する。本研究のような小集団の会話を録音した場合には、通常の会話分析のように、話者を特定することが困難である。つまり、話し手が交替しているのが厳密に区別できないことから、会話分析の解析方法を用いることは困難であることも明らかになった。また、体育授業の多くは運動学習に割かれている。運動学習中の発話は、個別であり、加えて動いていることに対応した無線機器による録音が必要になる。しかし、授業中に話していることとその後の振り返りでは、思考の形態が異なる

ことが予想され、その発話も異なることが示唆された。個人種目である動作の獲得と集団種目である球技の動きではそのできるようになる過程や獲得を助ける言葉も異なることが予想されるため、研究方法を開発しながら授業改善に役立つ知見を明らかにしたい。

5. まとめ

主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善のためには、授業において児童生徒が何を話しているかを教師が把握することが有効である。特に体育では、教室とは異なる場で学びが起るため、その小集団で交わされる言葉は、一般的な会話分析とも異なる。本研究では、授業におけるできばえとあわせて児童生徒の話し合いの言葉と振り返り記述を分析したところ、通常の会話とは異なる傾向が見られ、体育特有の話し合いのパターンが明らかになり、以下の知見が得られた。

1. 話し合いの量は振り返りの記述量に影響を与えないことが示唆された。
2. 話し合いと振り返りの出現単語を比較すると異なる傾向が見られた。
3. 球技の話し合いにおいては、「こっち」などの空間や位置を示す言葉が多く出現することが明らかになった。

今後の課題として、授業における発話をまとめる際には、運動の種類、レベルや志向、年齢・学年や習熟・既習の状況を明らかにしながら、空間や場所を視覚化する言葉、時間や力の加減をリズム化した言葉に焦点を絞って成果を整理していく必要がある。

注

注1) Mehan (1979) によれば、教室のコミュニケーションパターンは独特であり、発話連鎖といわれる「働きかけ-応答-評価」で構成され

ている。一斉授業の中では、教師は既に知っていることを知らない児童生徒に聞く構造の中で対話が行われているのである。その対話は、情報の伝達のみならず、児童生徒の応答や教師の発問そのものを対象として評価が伴っていることにも特徴がある。

注2) 対話という言葉が示すのは、対面で行うものだけを指すものではない。一緒に学ぶ児童生徒はもちろんであるが、教職員だけでなく、地域の人々、先哲の考え方との対話も含まれる。ここでの対話は、特に授業において直接的に話し合うことに焦点化する。

注3) Sacks (1974) によれば、会話には規則性(会話の順番取りシステム: turn-taking system)があり、話し手が次の話し手を選択して話し手が移行し、話し手が次の話し手を選択しなければ、話し手は最初の話し手に戻り、そうでなければ、話し続けてもよいといったことが行われている。ただし、教室における会話は、このような規則が適用される日常会話とは区別される。

注4) 本稿では、児童を対象としているが、当然ながら生徒や競技者でも成立する。本稿の対象とした事例では、小学生の授業であるため、児童という用語を使用しているが、環境や文脈によって用語を変更してもその意図するところは変わらない。

注5) 会話分析では、時枝(1955)は、言語の機能を「1. 実用的(手段的)機能、2. 社会的機能、3. 鑑賞的機能」に分類し、林(1979)は、これらを階層的に捉えている。これらの階層からみれば、体育の授業中のコミュニケーションでは、鑑賞的機能はあまり見られない。また、Jakobson(1960)は、言語のコミュニケーション機能を、1 表出機能(送り手の内面を表出する機能)、2 刺敬機能(受け手に働きかける機能)、3 表示機能(内容事物を表す機能)、4 鑑賞機能(表現を享受させる機能)、5 注釈機能(言葉を意識させる機能)、6 接触機能(送り手と受け手のつながりを保つ機能)に分類した。

注6) エスノメソドロジーとは、ガーフィンケル

によって提唱された日常を構成する方法を研究する社会学である。出来事を解釈して方法論を明らかにする研究とされる。

注7) オースティン(1978)は、発話に関わる行為(speech act)を、①意味のある文を発話する発語行為(locutionary act)、②発話によって行為を遂行する発語内行為(illoctionary act)、③発話による結果を表す発語媒介行為(perlocutionary act)の3つに分けている。

注8) オノマトペとは、学術用語集では、擬声語を指すが、擬態語と擬音語に分けられる。体育授業で用いられるオノマトペは、タイミングやグレーディングを擬態語によって表したものが多。吉川(2013)は、オノマトペを用いたコツの伝え方について言及している。

注9) 会話分析の順番取りシステムでは、話し手に相手は傾聴し、あいづちも含めて順番に発話が行われる。伝(2008)によれば、先行発話と後続発話は対をなす。会話は、隣接対と呼ばれる類型化されたパターンでなされている。

引用文献

- 秋田喜代美(2006) 教室談話と学習. 秋田喜代美, 改訂版授業研究と談話分析. 放送大学教育振興会, pp.83-84.
- ヴィゴツキー: 柴田義松訳(2001) 思考と言語. 新読書社.
- Blatchford, P., Baines, E., Kutnick, P. and Martin, C. (2001) Classroom Contexts: connections between class size and within class grouping. *British Journal of Education Psychology* 71:283-302.
- Blatchford, P., Goldstein, H., Martin, C. and Brown, W. (2002) A study of class size effects in English School reception classes. *British Education Research journal* 21 (2) :169-185.
- 伝康晴(2008) 会話・対話・談話研究のための分析単位—隣接ペア—. *人工知能学会誌* 23 (2) : 271-276.
- 江刺幸政ほか(1973) 新体育(生活体育)理念の転

- 換過程. 前川峯雄編集. 戦後学校体育の研究. 不昧堂, pp.237-274.
- 藤江康彦 (2006) 教室談話の特徴. 秋田喜代美. 改訂版授業研究と談話分析. 放送大学教育振興会, pp.51-71.
- 林四郎 (1979) 言語行動概観. 南不二男編. 講座言語第3巻言語と行動. 大修館書店, pp.69-98.
- H. Sacks, E. Schegloff & G. Jefferson (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for conversation, *Language* 50 (4), pp.696-735, in Schenkein (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic press, 1978.
- 石井英真 (2016) 資質・能力ベースのカリキュラムの危険性と可能性. *カリキュラム研究* 25 : 83-89.
- Jakobson, R. (1960) *Linguistics and poetics*. In Thomas A. Sebeok (Ed.) . *Style in language*. Cambridge: The M. I. T. Press, pp.350-377.
- J.L. オースティン:坂本百大訳 (1978) 言語と行為. 大修館書店.
- 国立教育政策研究所 (2020) 主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について. (https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r02/r020603-01.pdf)
- Mehan, H. (1979) *Learnig lessons : social organization in the classroom*. Cambridge. M.A. : Harvard University Press.
- 茂呂雄二編 (1997) 対話と知 談話のための認知科学入門. 新曜社, pp.1-7.
- 中島定彦 (2020) ことばの使われ方. 学習と言語の心理学. 昭和堂, pp.110-112.
- 西原鈴子 (1997) 談話分析—ことばはどのように使われているか—. *日本語教育通信* 29 : 14-15.
- 佐伯胖 (1996) 学びあう共同体をつくる. 佐伯胖・中西新太郎・若狭蔵之助編. フレネの教室1 学びの共同体. 青木書店, pp.10-31.
- 佐藤学 (1996a) 学び合う共同体. 東京大学出版会, pp.89-100.
- 佐藤学 (1996b) 教育方法学. 岩波書店, pp.93-96.
- 佐藤学 (2010) 教育の方法. 左右社, pp.97-108
- 佐藤学 (2014) 学びにおけるコミュニケーションの構造—対話的実践による学びの共同体へ—. *日本コミュニケーション研究* 42 : 7-13.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis*. Chicago, Il : University of Chicago Press. 南出康世・内田聖二 : 共訳 (1989) 『談話分析:自然言語の社会言語学的分析』. 研究社.
- 高橋健夫・大友智・高田俊也 (1994) 授業過程の観察・記録法. 高橋健夫編著. 体育の授業を創る. 大修館書店, pp.238-240.
- 武田加奈子 (2007) 発話行為談話の調査・分析方法—勧誘談話を例に—. 『接触場面と言語管理の学際的研究』接触場面の言語管理研究vol.5. 人文科学研究科研究プロジェクト報告書第154集 : 13-35.
- 時枝誠記 (1955) 国語学言論続編. 岩波書店, pp.93-118.
- 山田富秋 (1999) 会話分析を始めよう. 好井裕明・山田富秋・西坂仰編. 会話分析への招待. 世界思想社, pp.1-35.
- 山中佐織 (2022) 佐伯胖の「学び」論の形成過程. *教育方法の探究* 25 : 53-60.
- 山根智恵 (1993) 発話機能から見た日本語の会話の構造. *岡大國文論稿* 21 : 116-106.
- 與儀峰奈子 (2003) 会話分析. 山内進編. 言語教育学入門:応用言語学を言語教育に活かす. 大修館書店, pp.82-109.
- 吉川政夫 (2013) 運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ. *バイオメカニズム学会誌* 37 (4) : 215-220.
- 好井裕明 (1999) 制度的状況の会話分析. 好井裕明・山田富秋・西坂仰編. 会話分析への招待. 世界思想社, pp.62-65.